

2022年度 女子大生が地域課題にチャレンジ！ローカルSDGsプロジェクト

安田女子大学現代ビジネス学科竹下ゼミ生11名が2チームに分かれ、三次市の浄水場に流れ着いたミネラル豊富な天然泥を乾燥、凝縮した土壌改質材・水質浄化材『瀨織』を活用した新商品開発に取り組みました。



【レクチャー会】 両チームの活動

協力：生原商店、クラシノワ舎

生原商店、クラシノワ舎のローカルSDGsな取り組みを学ぶ会を実施！

5月



【三次市訪問】 両チームの活動

協力：三良坂フロマージュ

三良坂フロマージュに伺い、山地酪農のローカルSDGsな取り組みを取材！

6月



【レクチャー会】 両チームの活動

協力：三次市 地域振興部

三次市の魅力や課題を学ぶ会を実施！

7月



【中間報告会】 両チームの活動

協力：生原商店、クラシノワ舎、三次市水道局、(株)ウォーターエージェンシー
会場：ハイツカ湖畔の森

瀨織の制作現場(浄水場)の見学・講義、ゼミ生による新商品アイデアのプレゼン・意見交換会、瀨織染め羊毛作り体験を実施！

10月



【試作品製作会】 Bチームの活動

協力：クラシノワ舎、ハイツカ湖畔の森

クラシノワ舎の方にかぎ針編みを教えていただき、Bチーム考案の新商品の試作品をゼミ生が製作！

11月



【ワークショップ開催】 Aチームの活動

ショッピングモールで開催されたSDGsイベントにて、Aチーム考案の『ペットボトルワークショップ』をゼミ生主体で実施しました！

ペットボトルで作るクリスマスツリー、キーホルダー合わせて150組の方に制作していただきました♪

12月



【新商品売り販売】 Bチームの活動

協力：(一社)WES 会場：旧ガラスの里

旧ガラスの里で開催されたSDGsイベントにて、Bチーム考案の新商品『土に還るコースター』をゼミ生がお客様にご説明し、売り販売しました！用意したコースター完売&予約をいただきました♪

Aチーム成果物 Aチームの活動

『ペットボトルワークショップ』

ペットボトルのゴミ問題に着目！新たな付加価値をつければゴミは生まれ変わることができることを伝え、親子世代にゴミ問題について考えていただくきっかけとして開催♪



1月

Bチーム成果物 Bチームの活動

新商品『土に還るコースター』

コンセプト：『日常を彩る(くるる)』
すべて捨てられるものを使って一つずつ手編みした、三次産のサステナブルな商品。三良坂フロマージュの羊の毛をクラシノワ舎のお母さんたちが生原商店の商品『瀨織』で染めた羊毛を使用し、地域活性に貢献♪



両チームの活動



【最終報告会】 『女子大生が地域課題にチャレンジ！ローカルSDGsプロジェクト』

トークショー&ワークショップ@無印良品 広島アルパーク

協力：生原商店、クラシノワ舎、無印良品 広島アルパーク、大学生4名(撮影・取材)
取材：メディア3社(テレビ局：1、新聞社：1、情報誌：1)

参加者
約20名

取材
メディア3社

【イベント内容】

- 成果報告プレゼン
- トークショー
- ワークショップ
- これまでの活動の展示
- 新商品・関連商品販売

1年間のプロジェクトの集大成として、外部の方を招いて最終報告会を実施！成果物であるワークショップ・新商品への想いや成果についてゼミ生がプレゼン。トークショーでは、関係者の想いやプロジェクト全体の成果について、ゼミ生と関係者がトークし、参加者とも交流しました。ペットボトルワークショップ、かぎ針編みワークショップも実施し、作品作りを楽しんでいただきました！また商品販売も行い、新商品『土に還るコースター』は完売♪イベントを通して、ローカルSDGs・ESDの意義や協働について共有できました。

参加学生の声

SDGsを自分事化

プロジェクト参加前はSDGsは自分に関係ないと思っていましたが、新商品開発を通して、自分たちにもできることがあると気づくことができました！

自己成長・自己分析

企業の方と協働でプロジェクトを進めたことが、貴重な社会経験になりました！いろいろな力が鍛えられたし、自分の強みや弱みを理解することができました。

企業の見方が変化

プロジェクトを通してSDGsを学んだので、SDGsに積極的に取り組む企業に就職しようと思うようになりました。いずれは、SDGsに貢献できるような仕事がしたいです。

関係人口創出に

大学生の皆さんからアイデアをいただき、創作メンバーの刺激になりました！また、関係者の方に三次を好きになってもらい、関係人口を増やすきっかけになりました。

協力者の声

協働により大学生が成長

外部の方と協働で、自分たちの考えたものを形にする経験をしたことで、ゼミ生が大きく成長しました！

企業×大学生協働の可能性

地域課題解決に貢献する商品や取り組みを若い世代に知ってもらえるきっかけになりました。これからは企業と大学生の協働がカギになるのではと感じます。